

8月中旬、ミュンヘンから、アルプスに向かって南へ小一時間程の小さな町ムルナウのお城で開かれている(11月初旬まで)「『青い騎士』とジャポニズム」という展覧会を観た。ムルナウは1905年から数年間、夏の間、カンディンスキーとガブリエーレ・ミュンターが過ごし、青い騎士のメンバーのフランツ・マルク、アウグスト・マッケ、アレクセイ・フォン・ヤウレンスキー、マリアンネ・フォン・ヴェレフキン、パウル・クレーをはじめ友人達がその「ロシア人の家」に集まってきた町として有名で、このグループとは、作曲家のアルノルト・シェーンベルクも親しかったことは刮目に値する。音楽に於ける調性の崩壊と、美術に於ける抽象の成り立ちには、ある種の相関関係がある、と私は考える(しかし間違っているかも知れない)。この展覧会を観て感じたり、思ったりしたことは多々あるが衝撃的だったことの一つは、カンディンスキーが日本の切り絵を所有していたこと。これを彼は晩年まで手放さなかったのだ。そして、それが彼の抽象への道の出発点であったであろうことも察し得たことだ。しかし彼はジャポニズムや、浮世絵、日本の芸術に関しては一言も手記や著述には残していないのだ。ある個人にとって最も大切な事柄は言葉にせず、あるいは出来ず、心の中の奥深くにしまって置くものなのかも知れない。何故なら、それは言葉として表現してしまうや否や、自分の心の奥深くで、その最も大切なものが胡散霧消してしまうという懸念に苛まされるからなのかも知れない。カンディンスキーは従来ヨーロッパ絵画には自分自身の中で限界を感じ(具象で素晴らしい作品を数々残し、私の様な音楽家にはリムスキー・コルサコフ、又プロコフィエフまでも連想させる示唆に富むものが沢山あるのに)。彼は日本の美術と出会うことによって具象を捨て、抽象へと進む勇気と決断力を得たのではないか、と感じられることだ。私は、生意気にも、カンディンスキーは過大評価されていると思っている。彼が本格的な抽象画を成す様になるのは、モスクワに戻り、ロシア・アヴァンギャルド達の純粹なアブストラクト芸術と出会ってからなのだ。彼は抽象美術の創始者と

(間違って)言われているが、彼は中期以後の作品にはヴァイタリティーが少ない。まさに、澄ましたお姫様のような。

私にとってのもう一つは大きな印象は、ユリウス・エクスターと原直次郎との深い友情だ。これには森鷗外も一枚からんでいるらしい。この展覧会のカタログにも鷗外のミュンヘンでの言動について触れられている。改めて鷗外について調べ彼の全体像をつかむ努力をしてみたい。

今回のドイツ滞在中には、バイロイト音楽祭からのTVの実況中継で「ローエングリン」を観、聴いた。歌手達は皆素晴らしく、オーケストラも問題なかったが、演出は大変ヒドイもので、その様な演出を良しとするヨーロッパ人を私は理解することができない。歌手達は本当に気の毒だ。我々の様な年輩者は昔の、少なくとも別の演出の数々を知っているが、今の若い人達には今日の様な本当にヒドイ演出しか提供されていないのだ。私ならもう二度とあの様な演出でワーグナー作品を体験したくない。多くのドイツ人の若者達もそう思うに違いない。ヨーロッパ文化の崩壊は本当に進行中なのだ。我々非ヨーロッパ人には高い見識と冷静な判断力が要求されている、と感じた。